

「博士論文」合否査定資料

申請者
職・氏名 同志社女子大助教(有期) 今井 由美子

学位の名称 博士 (英語英文学)

論文名 EFL 学習者におけるリスニング教育と語彙学習

審査委員 主 査 飯田 毅

副 査 若本 夏美




副 査 甲元 洋子

審査結果 合

2013.2.7 英語英文学専攻博士後期課程委員会 承認
2013.2.14 文学研究科博士後期課程委員会 承認

博士学位論文審査結果報告書

2013年 2月 5日

学位申請者	今井由美子		
審査委員	主査	飯田 毅	
	副査	若本夏美	
	副査	甲元洋子	

同志社女子大学表象文化学部英語英文学科助教（有期）、今井由美子より「EFL 学習者におけるリスニング教育と語彙学習」というタイトルの論文を添えて博士の学位の申請があり、これを受けて公正に審査委員が決められ主査飯田毅、副査若本夏美・甲元洋子の3名が厳正な審査に当たった。



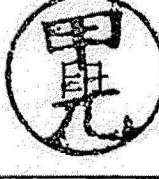
2012年の10月初旬に申請論文が手渡された後、審査員3名はそれぞれ時間をかけ、申請論文の査読に当たった。2013年1月に主査は、それぞれの副査と連絡を取り、申請論文について意見交換を行った。

2013年2月5日に公開の口頭試問会を開き、申請者に対して論文内容を確認する60分にわたる試問を行った。各委員からは忌憚のない質問や意見が寄せられたが、それらに対して申請者は、丁寧かつ明確に、適切な応答をした。この試問を通して、申請者の研究の確かさが十分に確認された。

申請者は、同志社女子大学短期大学部の嘱託教員として働き始めてから一貫してリスニングに関する研究を他の研究者と共に進めてきた。本論文において、申請者は英語のリスニングに必要とされる英語の語彙学習に焦点を当て、既存のテスト及び申請者が独自に作成したその修正版を利用しながら7つの研究を実施し、それぞれの結果を章ごとにまとめ、大学教育におけるリスニングの指導法に関する新しい方向性を提案している。一連の研究は、2005年から2012年8月までに申請者が学会で口頭発表したものや学会誌等で発表した論文を再構成したものである。本論は、本学の学生を研究対象としながら、先行研究を十分に咀嚼した上で、新たな研究課題を設定し、適切な統計処理と解釈を施し、明確な論理展開でまとめられた、非常に興味深い内容の研究である。日本の英語教育の発展ばかりでなく、本学の学生に対しても英語力向上に貢献する側面を持った論文であると言える。よって審査委員は全員一致で今井由美子の申請論文に対して、博士（英語英文学）の学位を授与するに値するという結論に達した。

博士學位論文内容要旨

2013年 2月 5日

学位申請者	今井由美子	
審査委員	主査	飯田 毅 
	副査	若本夏美 
	副査	甲元洋子 

(要旨) 論文名「EFL 学習者におけるリスニング教育と語彙学習」

本論文は、英語のリスニング(以下リスニング)に必要とされる英語の語彙学習に焦点を当てたものであり、既存のテスト及び申請者が独自に作成した修正版を利用しながら7つの研究を実施し、それぞれの結果を章ごとにまとめ、大学教育におけるリスニングの指導法に関する新しい方向性を提案している。全体で6章からなる本論は、日本語で書かれ、引用文献を含めた本文は108ページになる。一連の研究は、2005年から2012年8月までに申請者が学会で口頭発表したものや学会誌等で発表した論文を再構成したものである。本論では、以下の7つの研究テーマを扱っている。

- (1) リスニング力向上と語彙レベルの関係、
- (2) リスニング力や語彙力の違いにより学習者が異なる学習方略を用いる可能性の検証、
- (3) 語彙調べ活動が与えるリスニング力への教育的効果、
- (4) 語彙調べ活動における語彙レベルの違いがリスニング力へ与える影響、
- (5) 発表的語彙知識を測定するための語彙レベルディクテーションテスト(VLDT)の応用可能性と信頼性の検証、
- (6) VLDTの信頼性と妥当性の検証、
- (7) VLDTの一部の妥当性に関する問題の修正及びVLDT平行テスト間と語彙テストとの信頼性についての再検証、

それぞれの章ごとに扱われている研究を中心に以下に本論の内容の要旨をまとめる。

第1章では、本論文作成の動機と論文の全体構成が述べられている。また、リスニングに必要とされる基本的能力や総合的な語学力について、まとめられている。その中で、リスニングは単なる聞き取りの1技能ではなく、総合的な言語能力の基盤であることが強調されている。また、リスニングという分野において極めて重要である学習者要因が語彙力と学習方略であることを明らかにした実験結果に言及し、本研究に至った動機が紹介されている。

第2章では、最初に外国語学習における語彙力の重要性に関する先行研究を踏まえ、第2言語学習者が日常会話において必要とされる最低限の語彙(閾値)を2000語であるという仮説を取り上げた。その仮説を検証するために、研究1を考案し、大学生を研究協力者としてリスニング力と語彙力に関する各種テストを実施し、分析を試みている。その結果、3000語レベルまでの語彙力を育成することがリスニング力向上に最も寄与する、と結論づけている。

第3章では、リスニングと学習方略に関する研究2を扱っている。研究2の目的は、リスニン

グ力や語彙力の違いにより、学習者が異なる学習方略を用いるかどうかを検証することにある。学習方略の因子分析結果から、リスニングの高得点群の学習者の語彙学習方法の傾向として、文脈からの推測、単語記憶、音韻・背景知識の方略を用いていることを明らかにした。この調査結果を踏まえ、語彙学習は語学学習における基本であり、単語の意味の他に、品詞情報、音韻情報、辞書情報を合わせて基本語彙力を育成することが重要である、と論じている。

研究3では、研究協力者に語彙調べ学習を課し、その学習がリスニングに対してどの程度教育的効果があるのか、という点を明らかにしている。仮説として、協力者を2000語群とAcademic語群に分け、辞書調べ課題を課すことによって、2000語レベルより高いレベルの語彙学習がリスニングの学習効果を高めるとした。調査の結果、残念ながら、辞書調べ学習グループ間のそれぞれの得点に統計的に有意な差を見いだすことができなかった。しかし、TOEIC総得点が110点(+1SD)上昇した学習者と50点減少した学習者(-1SD)の間の語彙レベルを比べると、統計的に有意な差を見いだすことができた。この結果から、TOEIC総得点上昇群は2000語レベルを既に習得していたためにリスニング能力が伸びたことが示唆された。このことから、学習者が英語能力を向上させるためには2000語レベルに到達していること、また、3000語レベルの語彙習得を目指して語彙学習を仕向ける指導の必要性を説いている。

研究4では、辞書調べ活動の際の語彙レベルの違いがリスニング力に与える影響について検証している。研究方法として、春学期には2000語レベルの課題を全員に与え、秋学期には3000語レベル語彙学習者群とAcademic語レベル語彙学習者群に分け、課題を与えている。結果として、3000語レベルの辞書調べ課題の方が語彙力の向上にとって有利である、というデータを得た。

第4章では、音声学的視点であるボトムアップからの語彙指導の必要性に着目し、音声器官と発音のメカニズム、調音器官、聴覚器官、言語音の知覚・処理について述べ、音声の最小単位である音素についてInternational Phonetic Alphabet (IPA)を用いて説明している。英語の音と綴り字の関係が常に規則的ではないため、IPAの知識を活用することが、音韻情報の側面からの語彙学習において重要であることを述べている。




第5章の研究5では、ディクテーションを用いて発表語彙知識を測定する語彙レベルディクテーションテスト(VLDT)の適応可能性と信頼性の検証を試みている。ここでは、2つの実験が行なわれている。実験Iでは、VLDTのTest-A及びTest-Bの原版を利用し、両テストの相関係数と平均値の差異の検証を実施した。結果としてTest-Aの平均値がTest-Bに比べ、極端に低くなった。その原因として1つの句に含まれる単語数が多い事が原因である事が示された。そこで、実験IIでは、Test-Aの修正版を作成し、修正していないTest-Bと比較した。その結果、両者の間で総得点の差異に有意差があったが、全体としては差が小さくなった。また、長い句を聞き取る際に学習者の音韻ループの容量を超過してしまい、綴りとして再構築することが困難であることが示唆された。誤答例を分析すると、音声的処理はできてはいるが、意味や文法的処理ができていない誤答例が見られた。英語の音声と綴りの関係が完全に把握できていないことも指摘されている。

第6章の研究6では、VLDTの信頼性と妥当性について検証を試みている。また、EFL学習者の発表的語彙は受容的語彙のおよそ半分であるという先行研究をここで改めて検証している。英語リスニングテスト、VLDT、語彙レベルテストを用いて分析した結果、VLDTのTest-Cの平均値が他と比べて極端に低かったが、VLDT全体としては語彙力測定の尺度として信頼性を示していることが分かった。また、先行研究の通り、発表的語彙サイズは受容的語彙サイズの50%であることが確認された。Test-Cの結果から、VLDTを日本人EFL学習者への適用する際に、改善の余地があることが示唆された。そこで、研究7では、そのVLDTのTest-Cの難易度を修正し、VLDTの平行テストと語彙テストの信頼性について再検証を実施した。その結果VLDTの総得点は高い信頼性を示した。このことは、EFL学習者にとって、ディクテーション形式語彙テストは、高レベルの語彙の聞き取り、複雑なスペリング、複数形の処理、長い音節数の語彙の聞き取りに困難があることを示している。

以上、全体をまとめると、本論文ではリスニングと語彙学習において、一連の実験結果から、リスニング向上のための語彙力、リスニングと語彙の学習方略、音声・音韻的知識を含めた語彙学習、VLDTの日本人EFL学習者への適用と妥当性の検証を論じている。



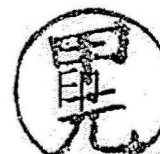
博士学位論文審査結果要旨

2013年 2月 5日

学位申請者	今井由美子		
審査委員	主査	飯田 毅	
	副査	若本夏美	
	副査	甲元洋子	
論文題名	EFL 学習者におけるリスニング教育と語彙学習 Teaching Listening and Vocabulary to EFL Learners		
(要旨)	<p>同志社女子大学表象文化学部英語英文学科助教(有期)、今井由美子より「EFL 学習者におけるリスニング教育と語彙学習」というタイトルの論文を添えて博士の学位の申請があり、これを受けて公正に審査委員が決められ、主査飯田毅、副査若本夏美・甲元洋子の3名が厳正な審査に当たった。</p> <p>学位申請者、今井由美子は、同志社女子大学短期大学部の嘱託講師として採用されて以来、当時同僚であった枝澤康代教授に薫陶を受け、ほぼ毎年研究発表を行い、主要な研究について論文をまとめてきた。数々の論文や研究発表があるが、その研究に流れる一貫したテーマは英語のリスニングに関するものであり、現在までに学生の英語力向上のために様々な方法を研究し、実践してきた。つまり、申請者の研究の根本には、単なる理論研究に終止することなく、理論と実践を常に結びつけ、最終的には本学の学生の教育に寄与しようとする教育研究者としての発想がある。申請者の研究は、常に本学の短期大学部生や本学学生を対象としたものであり、共同研究という形を取りながら研究を進めてきた。共同研究の中では、特に指導的役割を果たしている。上記申請論文は1995年に学会で共同発表して以来研究を進めてきたリスニングに関するものであり、とりわけ英語教育界で最近話題となっている語彙と学習方略に焦点を当てた実に興味深い研究である。</p> <p>申請論文は日本語で書かれ、A4版ワープロ用紙で引用文献を含めた本文は108ページになる。一連の研究は、2005年から2012年8月までに申請者が学会で口頭発表したものや学会誌等で発表した論文を再構成したものである。申請者は、リスニングを言語能力の単なる1つのスキルとするのではなく、言語能力の重要な基盤として捉えている。これは、従来の英語教育に欠けていた視点でもある。また、申請論文は、関連する7つの研究テーマを詳細な分析とともに扱っている点にも特徴がある。特に、リスニングの閾値を学習者が2000語の語彙を習得しているかどうかにある、とした点は今後の学生のリスニング指導の参考となるであろう。また、それぞれの研究テーマに対して、適切な研究方法を選択し、必要な統計処理をした後に、詳細な分析と考察ががされている点も注目に値する。</p> <p>査読者のうち、英語学習方略の専門家でもあり、リスニングの教育・研究にも詳しい若本副査からも、極めて優秀な内容の論文であるとの評価を得た。よって審査委員は全員一致で今井由美子の申請論文に対し、博士(英語英文学)の学位を授与するに値するという結論に至った。</p>		

試問結果の要旨

2013年 2月 5日

学位申請者	今井 由美子	
審査委員	主査	飯田 毅 
	副査	若本 夏美 
	副査	甲元 洋子 

(要旨)

同志社女子大学表象文化学部英語英文学科助教(有期)、今井由美子より「EFL 学習者におけるリスニング教育と語彙学習」という論文を添えて博士学位の申請があった。これを受けて公正に審査委員会が決められ、主査として飯田毅(同志社女子大学学芸学部教授)、副査として若本夏美(同志社女子大学表象文化学部教授)ならびに甲元洋子(同志社女子大学表象文化学部教授)の3名が審査委員として厳正に論文審査にあたった。各委員はあらかじめ申請論文を十分に査読した後、主査が各副査ごとに個別に論文に対する意見交換をする機会を設けた。個別の意見交換の後、2月5日に公開の口頭試問会(60分)を開いた。

最初に、甲元副査から口頭試問の概略について説明があった後、改めて申請者に本論文の概要について述べるように求めた。その後、甲元副査から本論文について論文の内容に関する全体的な所見と簡単な質問があった。

次に若本副査から、統計処理及び学習方略を中心とする質問があった。語彙テストの相互相関係数の解釈、研究2の「語彙力とリスニングにおける学習」の因子分析の解釈、発表語彙の測定方法に対する疑問等について鋭い質問がいくつも投げかけられた。

主査・飯田からは、より広い視点から質問があった。リスニング力を測る CELT の妥当性の根拠、一般的語彙と学問的語彙の違い及び共通性、辞書調べ学習課題の問題点と今後の展望、音韻とスペリングの指導に関して phonics の役割、今後の研究を踏まえて語彙の深さに関する質問が投げかけられた。

各委員に対する申請者の受け答えは要点を押さえた非常に明確で分かり易いものであった。また、その応答は長年英語のリスニングの研究に従事してきたからこそ答えられる内容でもあった。論文には表現されてはいない申請者の知識も披露され、ここに至までの着実な研究の積み重ねが自ずと明らかになった。よって3名の審査委員は申請者に対して、博士(英語英文学)の学位授与に十分値するという結論に達した。